



Title	はじめに
Author(s)	高島毛, 敏雄
Citation	井戸武實の歩みと追悼集. 2025, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

I. はじめに

井戸武實追悼集作成委員会

代表 高鳥毛 敏雄

関西大学社会安全学部・研究科教授

お元気な姿しかみたことがなかった井戸武實さんの突然の訃報に接し、大変驚きました。

井戸さんと長年仕事をしてきた立場にあることから、井戸さんのこれまでの功績をたたえ、井戸さんに関わる思い出やエピソードを綴った文章や写真をまとめ、故人を知る人たちやご遺族と共有し、後進に残すべきことが多いと考え大阪結核勉強会が中心となって追悼集を作成することといたしました。

井戸さんが最も輝いていたのは「NPO ヘルスサポート大阪（以下、NPOHESO）」の事務局長の時期だったように思います。井戸さんが「あいりんの井戸さん」となったのは NPO の事務局長となったことからです。この NPO について説明が必要と思われるので少し紹介させていただきます。NPOHESO は 2006 年 7 月に、矢内純吉先生を理事長とし、黒田研二、黒川渡、山本繁、高鳥毛敏雄、藤本敬三、西森琢、逢坂隆子、高嶋哲也、安部満枝、小杉好弘、高松勇、辻美恵子の方々の 12 名を理事とし、そして坂井芳夫を監事として設立されました。しかし、NPO の設立は逢坂隆子先生の多大なるご尽力とその人的ネットワークによってつくられたものでした。何を目的としていた NPO だったのかについては設立趣旨書に示されています。長くなりますがこれを一部省略して紹介させていただきます。「大阪をはじめとする大都市には、ホームレス者をはじめとする保健・医療・福祉の手が届きにくい人々が数多く居住する。このような人々の健康問題は、本人自身はもとより社会全体としても大きな問題であり、これらの人々を放置することは、人道的にも極めて重大な問題である。しかし、この健康問題は、行政だけで、あるいは民間だけで解決できるものではなく、社会全体として取り組んでいくことが欠かせない」と考える。我々は、ホームレス者をはじめとする保健・医療・福祉の手が届きにくい人々への健康支援活動を推進するとともに、必要な関係機関・団体の協議の場づくり、研究ならびに研修・人材育成を行い、野宿を余儀なくされている人々の生活を支え、命を守る活動を進めたい。そして、特定非営利活動促進法に基づく法人格を取得することにより、健康支援活動を一層充実させ、そのことを通して市民が健康で安心して暮らせる社会の創造に寄与することを目的に本法人を設立する」としていました。

NPO 法人 HESO の事務所は、当初は特別清掃事業で朝晩に就労者が集まる建物の二階をお借りしていました。近くに NPO 釜ヶ崎支援機構の事務所があり、またあいりん総合センター、大阪社会医療センター付属病院、西成労働福祉センターがありました。井戸さんは毎日その事務所に通い保健師とともに野宿者や就労者の健康相談や健康支援活動を行い、NPO の設立趣旨書に掲げた「ホームレス者をはじめとする保健・医療・福祉の手が届きにくい人々への健康支援活動を推進するとともに、必要な関係機関・団体の協議の場づくり、研究ならびに研修・人材養成を行い、野宿を余儀なくされている人々の生活を支え、命を守る活動を進めたい」ということを一つ一つ具現化していってくれました。

NPO 法人 HESO が解散した後は、公益財団法人大阪公衆衛生協会の初代事務局長に就任していただ

きました。そして、公益法人の柱とした「ストップ結核パートナーシップ関西」の事業化にご尽力をしていただきました。ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップは、「大阪結核勉強会」が企画運営する役割を担ってきました。ところが、2021年3月に大阪公衆衛生協会が解散し、さらに新型コロナウイルス感染症の流行が収まらずストップ結核パートナーシップ関西のワークショップの存続が危ぶまれる状況となりました。2022年度はオンライン開催とすることで何とか乗り切りました。

2023年度は対面方式で本格開催することとしましたが事務局の大阪公衆衛生協会が解散されていたことから混乱がありました。しかし、井戸さんが今まで通り事務局を引き受けていただいたことで多くの方々が集ったワークショップが開催できました。無事開催できたことを関係者で祝い打ち上げ会を行いました。その場で井戸さんはご自慢の詩吟をはじめて吟詠されました。その時の元気なお姿は幻だったのかと今でも不思議な思いがしています。しかし、詩吟を吟詠されている井戸さんを拝見し、それまで苦勞されてきた井戸さんが余生を楽しんでいる姿を確認することができ安堵させていただきました。

このように井戸さんにはNPO及び公益財団法人の事務局長を次々にお問い合わせしてもらいました。井戸さんは愚痴ひとつ言わずに引き受けてやり遂げてくれました。しかし、法人の事務局長の仕事は、行政職の方でないとは難しいことが多く苦勞されたと申し訳なく思っています。理事会、評議員会の開催案内や資料作成、予算書や決算書の作成、大阪府総務部法務課などへの書類の提出など、実に多くの事務作業を強いることとなったからです。事務所に立ち寄るといつも遅くまで仕事をしていました。井戸さんが倒れそうで心配となり早く帰るように声かけさせていただきましたが、それくらいのことしかできずお詫びしたいと思っています。

井戸さんが最もやりがいがある仕事と考えていたのが大阪結核勉強会でした。結核勉強会は、分野の異なるメンバーが月一回集まりわいわいがやがや結核の勉強をする集まりです。年一回、ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップを企画し運営してきました。井戸さんのおかげで現在まで継続されています。追悼集をつくることは結核勉強会の場で決まり、寄稿の呼びかけ及び編集は結核勉強会のメンバーの三浦康代さんが引き受けてくれました。

井戸さんのあいりんでの活躍は日本が結核の中蔓延国から低蔓延国に移行した時期と一致しています。井戸さんの一生は蟬の生涯に例えることができるとふと思いました。蟬は幼虫時地下で数年間過ごし、地上に出てきます。地上に出てくると羽化して成虫となります。成虫の寿命は数週間もありませんが自由に飛び動くことができます。井戸さんは長い大阪府職員の時代を経てあいりん地区にやってきました。あいりん地区に来てから、いろんな人に出会い、囲まれ、多くの会合や活動に参加され、それまでとは見違える存在になられました。いわば、羽を得た蟬に例えられる時期ではなかったかと思えます。

本追悼集の作成に際しまして、ご賛同、ご執筆くださいました多くの関係者の皆様方、ご協力くださいましたご遺族に深く感謝申し上げます。

なお、本追悼集に掲載している写真等の肖像権につきましては各執筆者よりご本人の掲載許諾を確認しておりますが、無断転載・複製について慎んでいただきますようお願いいたします。

2025年3月吉日